第3節 専業主婦の世界 まとめ

これまでのアンケート結果とインタビューの声から専業主婦の生活満足度の高い理由を以下のさまざまな角度からまとめてみよう。

1）総合的な生活満足度

アンケート結果からは、子どものいる専業主婦のほうが、子どものいない専業主婦より生活満足度が高いことがわかった。

さらに、有職で既婚の子どものいる女性と子どものいる専業主婦を比べると、子どものいる専業主婦のほうが生活満足度は高い。仕事をもつことによってうまれるストレスが有職女性の生活満足度を下げているのではないだろうか。

インタビューからは、育児に専念したい、子どもと一緒に過ごしたい、子どもの成長が楽しみなどの子どもに対する感情が生活満足度を高めている様子がうかがえた。

2）現在の生活について

アンケート結果では、「これから先の生活が楽しみだ」「時間的なゆとりがある」「健康に自信がある」で5～6割、「理想に近い生活を送っている」が約5割を占めていた。

また、子どものいる専業主婦は「これから先の生活が楽しみだ」「健康に自信がある」の割合が高く、子どもの成長を楽しみにしている様子がうかがえた。

3）ふだんの生活について

アンケート結果より、子どものいる専業主婦は、テレビの視聴時間やインターネットをする時間は子どものいない専業主婦より少ないが、家族との会話時間（電話を含む）は多く、家族とのコミュニケーションにより多くの時間を費やしていた。子どものいない専業主婦と比べると、趣味やスポーツなどの頻度は少なくなるが、インタビューからは、家族との会話や子どもの世話をすることで満足度が高まっている様子がうかがえた。

4）人間関係

アンケート結果より、友だち、親、配偶者との人間関係は良好であった。友だちに約7割が、親には約5割が悩み事を相談していた。とくに配偶者との関係は友だちや親を超える存在であり、密接な関係であることがうかがえる。配偶者とよく話をし、悩み事を相談し、信頼し合い、関係に満足しているのは8割前後であった。

インタビューからは、子育てを通して意見がぶつかり合っても納得がいくまで話し合い、絆を深めていく夫婦の様子もみられた。

5）子どもの頃の親の様子

子どもの頃の親の様子が現在の家庭生活に反映しているようである。

アンケート結果からは、専業主婦では「家族の仲がよかった」と思う割合も比較的高かった。

インタビューからは、子どもの頃の親の幸せそうな様子を振り返って、自分も母親のように専業主婦となり、温かい家庭を築きたいと思っている様子がうかがえた。

解説・提言 4

「子どもの自立」は「親の自立」

―自立に向けた５つの条件とは―

立正大学教授　臨床心理士　宮城まり子

●増え続ける親になれない親たち

子どもの成長にとって最大の影響を与える要因は「家庭」である。子どもが成長の過程で、親と温かくふれあい、親から家庭教育やしつけを受け、豊かで思いやりのあるやさしい人間性を育み、善悪の判断、社会マナーや常識、身辺生活の知識やスキルなどを身につけることができるか否かは、家庭での「親の教育力」にかかっている。人間が子どもの「親になること」は、それは大きな厳しい責任と役割を背負うことだ。しかし、昨今のニュースに取り上げられるように、実の親による幼児の虐待、育児放棄、自他の命を大切にしない子ども、感情のコントロールのできず我慢が苦手な子どもの増加など、家庭における「親の教育力」の低下の問題は深刻化している。すなわち、「親になれない親」の増加の問題である。物理的に出産し親になることはいとも簡単でも、精神的に成熟した「大人の親」になることは難しい。子どもをもったその日から、子どもと一緒に親も学びながら、ともに育ちあい、発達し大人の親になる「共育」努力が欠かせない。

●育児のゴールは親子の自立

育児の最終ゴールは自立である。親がいなくても１人で自立し子どもが生きることができるようにすることである。そのために幼児期から自立へ向け、食事、着脱、排泄、入浴、など親に依存せずともできるように生活のなかで子どもをしつけ、教育をしているのである。そして、最終的には社会のなかで働き、収入を得、経済的にも親から自立し、子どもが自分の人生を歩むことができるようにすることが育児の目的であり、育児の社会的役割であるといえよう。

子どもを自立させる過程は、同時にまた親の子どもからの自立の過程でもある。子どもは成長に伴い、時間的にも物理的にも次第に親から離れ、生活するようになる。親子の距離が出てくるにしたがって、精神的にも自然に親子は分離していくのが本来の定理であった。しかし、最近では少子化のなか、親が先まわりして細かく子どもの世話をし、子どもが大きくなっても親子が互いに依存していつまでも離れられないような状態が散見される。

すなわち、「子どもの自立」を支えるのは「親の自立」であり、育児のゴールはともに「親子の自立」である。そのためには、子どもの成長に伴い距離をとり、子どもを手放し、離れていく子どもの後ろ姿を定位置から見送ることができる（子どもが離れたら、親から近づいていかない）親でなければならないだろう。親は子どもの成長と並行して、育児後の自分の生き方の青写真、育児から卒業した後の自分の世界を新たに構築しながら、「育児からの自立」の準備が欠かせない。

●自立のための５条件

子どもの自立のための５条件を考えてみよう。

① 心身の健康
② 身辺生活の自立
③ 精神的自立
④ 豊かな人間関係を結ぶ力
⑤ 経済的自立

の５つの要素である。それでは、次に１つひとつその内容を詳しく考えてみよう。

① 心身の健康

～家族とのコミュニケーションが一番の栄養～

まず何よりも子どもの健康である。身体だけでなく心の健康も含む。「食育」という点からみると、家庭ではどのような食事を子どもに与えているのだろうか。近年、子どもの肥満が問題となっている。また、学校での昼の給食が唯一のご馳走という子どももいる。ファーストフードなどのカロリー過剰の食事では問題。そして、楽しく家族一緒に食を共にする「食育」も大切。要は身体とともに食事を通して心も豊かに育てることが欠かせない。家での食事の風景の絵を子どもに描かせると、「孤食」の絵が多いことに気づく。すなわち、子どもがたった１人で食事をする絵である。親はいない、家にいても親はテレビを見ている。子どもは１人で食事という絵が目立つ。思春期になり心の病気がさまざまに表面化する子どもがいるが、幼児期からの親子の温かい心のふれあいを大切にしながら親子でコミュニケーションを行い、子どもの心を大切に育ててきたかどうかがその時に問われる。心の健康は身体の健康にも通じている。摂食障害（拒食、過食）など、心の病気から身体の健康にも大きな影響を及ぼすことも多い。自立にはこのようにまず心身の健康が欠かせないことは明らかである。

② 身辺生活の自立

～家事は身辺自立の第一歩～

自分の身の回りのことは自分で管理できることである。家事をしない子どもが日本ではとくに目立つ。家族の一員として、食事の支度、食器の洗浄、風呂やトイレの掃除、自分の部屋の掃除、洗濯物の整理、ふとん（ベッド）の片付けなど、家庭内で子どもができる仕事はたくさんある。しかし、勉強することのほうがより大切で、家事をさせる時間があったら勉強をさせたいと考える親が多いのが実態のようである。では、「家庭の役割」とは何だろうか。それは、何よりもまず子どもたちに「生活を教える」ことではないだろうか。家庭は勉強を教えるための学校ではない。たとえ勉強はできても、自分の身の回りの管理すらできない、頭でっかちな子どもに育ててはいないだろうか。夏のキャンプなどで子どもの様子をみると、身の回りの整理整頓もできない、お米も一度もといだことがないといった基礎的生活能力に乏しい子どもが実に多いことに驚かされる。これは、いかに日頃から家庭で親が生活教育を怠っているか、家事をさせていない証だと思われる。

家族の一員として自分の役割と責任を果たすことは、将来社会のなかで役割、責任を果たすことの基本につながるものである。このように、自分で身辺生活管理ができることは、子どもたちの自立ともっともかかわる本質的な部分であり、ここから精神的な自立、自分への自信にも連動する重要な自立の要素であることを忘れてはならない。

③ 精神的自立

～あえて口を出さない、手伝わない努力を～

人に頼らず、自分自身で考え判断し行動する力である。いつまでも親は側につきっきりで子どもに指示や助言を与えることはできない。いつか子どもは親から離れて、自分で問題の解決を行わなければならない。そのためには、幼い時から繰り返し繰り返し、子どもに考える力、問題解決する力をつける訓練が必要である。親が先回りして、「ああしなさい、こうしなさい」と指示している限り、子どもは何も考えようとしなくなることは当然である。指示待ちタイプの若者の増加はこうした家庭での原因が存在しているといえよう。

これから、少子化のなかで親に必要なことは、あえて手伝わない、あえて先回りして子どもに指示しないなど、行き過ぎた世話や保護（過保護）、行き過ぎたおせっかい（過干渉）を止め、「子どもに任せる」ことである。また、買ってやろうと思えば買える物でも、あえて買わない、物を与えない努力、親の忍耐力が必要である。忍耐強くねばり強い子どもは、忍耐強い親のもとで育つ。親自身が「ああ、面倒くさい」「ああ、もう、うるさい」「まあ、いいやこれくらい」とストレスに簡単に負けてはならない。育児は親にとって毎日ストレスと我慢の連続であるが、そこに親として人間としての成長の種が存在している。子どもに任せ、やらせてみるなかで、失敗から学ぶことは多く、また成功すれば子どもはそこから「やればできる」と強い自信が持てるようになるだろう。とにかく、口や手を出さず、子どもを信頼して任せ、親は我慢して見守ってやってはどうだろうか。

④ 豊かな人間関係を結ぶ力

～家族以外の人とコミュニケーションを～

社会は人間関係から成り立っている。「対人能力」は社会のなかで自立して生きるために不可欠の能力である。勉強はでき頭はいいが人間関係が結べない、コミュニケーションができない、自分を的確に表現できないようでは困る。相手と情況に合わせて柔軟に適切なコミュニケーションがとれて初めて、多様な人間関係が結べる。しかし、この能力は筋肉と同様で、一朝一夕には形成されない。「ハイテク」時代にこそ「ハイタッチ」の工夫が求められる。すなわち、子どもの時から、さまざまな年齢、性別、職業など多様な人々にかかわる経験を通して、人間関係の筋肉は形成されていく。そのためには、家族以外の人ともどのくらい接する機会をもっているか、そこで、適切な敬語を使えるかなど情況と相手に合わせ適切なコミュニケーションを行う機会をもたせることが必要だ。たとえば、子どもの時から１人で他家に宿泊する経験、地域の行事の手伝いに参加する、ボランティア活動で乳幼児、高齢者、障害者などに接する機会をもつなどさまざまな体験を通して対人関係や社会を学ぶことが必要である。人間は自分と異なり、１人ひとりがそれぞれ違うこと、コミュニケーションは相手が主役であること、人と信頼関係を築くことの難しさなど、実体験を通して学ばせることが必要であろう。

仕事は人間関係の流れ、コミュニケーションの流れからなる。将来仕事をし、協働を通して社会に適応できるようになるためには、子どもの時から絶えず対人能力とコミュニケーション能力を磨き育て、相手のニーズを適切に読み取る「対人感受性」を育成することが大切である。人は社会の人のなかに入って初めて実際に学習するのであり、貧しい人間関係や家に１人でいるところからは学びも深い自己への気づきも少ないだろう。

⑤ 経済的自立

～家庭のなかでのキャリア教育を～

最終的な自立は経済的な自立である。経済環境が厳しいなかで、企業側も若者を正社員として雇用する努力が一方で求められるが、若者も個々に働き収入を得、親に依存せずとも自らの生活を賄えることが欠かせない。そして、最終的に経済的な自立は精神的自立を支える条件となる。そのためには、自分はどのような仕事を通して社会に貢献し、その役

割と責任を果たすのか、自分の興味・関心のある仕事は何かなど、「キャリア」について子どもと一緒に話し合い考える機会をもつことは、学校だけでなく家庭でも大切である。親が自分の仕事、働くこと、やりがい、楽しみ、苦労などを子どもに直接話をすることを通して、社会や働くこと、仕事への興味・関心を育て、子どもの将来の夢を大切に育てていくことが大事だろう。また、社会理解のためには、折にふれニュースなども取り上げ、一緒に話し合いながら社会事象への理解や関心を深めることをしてはどうだろうか。

●将来を担う人材を育てるために欠かせない家庭・学校・地域の連携

フリーターやニート、多くの自殺者、少子・高齢化の社会における今後の日本の課題など、話し合うテーマは尽きない。子どもに将来の自分の「キャリア」について考えさせ、地域で実際にインターンシップ経験をさせながら、自らを主体的に磨き、育てようとする「キャリア意識」と意欲を育み、「生きる力、働く力」を育てるためには、家庭、学校、地域の密な協力と連携が欠かせない。日本の将来を担う大切な人材（人財）をいかに育てるかが家庭・学校・地域に問われている。

●若者の仕事生活実態調査報告書